若狭ゾーン
story

龍の約束

ここを目的に訪れる観光客が少ないゾーンながら、龍柱をはじめ異文化とのつながりを感じさせる興味深いエリア。琉球王国(現在の沖縄)の中心であった那覇に繰り広げられていた歴史背景を絡めながら、龍柱の秘密が明かされる。

◆登場人物

成　龍／清国人のエリート測量技術者　21歳
舞加那／久米村の女中
久米村の主人／中国の文人趣味にあこがれを持っている豪商
蔡　温／福州に留学経験があり、成龍とは旧知の仲
次　良／久米村の青年、御用聞き
徐葆光／成龍の上司の冊封使　成龍の仕事に信頼を置く
護国寺の住職／医術の心得がある

プロローグ

嘉慶6年2月16日―
ガタッ…ゴゴゴゴ…
船がきしむ様な音が響いたかと思うと、ゆっくりと、船が動き出した。
昨年、福建の港から渡航して、すでに8か月が過ぎている。
測量技師である私は、冊封国である琉球への使者として命を受け、尚敬王の儀礼のための船に乗った。清国の貧しい田舎に育った私は、出世のため技術者になろうと福州に出て、働きながら測量と土木を学んだ。
この時、福州にあった琉球館という琉球国の出先機関で働く、蔡温という若者と出会った。華人のように話し、詩歌を詠む教養豊かな琉球人だった。
彼に琉球語を教えてもらい、ついに琉球行きの船に乗ることができたのだ。
仕事は、琉球での測量と、琉球人にその技術を伝えること。
蔡温によると、土木工事の基礎となる測量技術は、琉球ではかなり必要とされているらしい。
この船は、琉球で御冠船といわれ、琉球国との外交儀礼、冊封を行う船だ。
乗船した我々649人は、琉球にとって皇帝の使者となり、全員来賓として扱われる。
最初は、旧友との再会以外、退屈な任務が待っているだけ、そんな思いで琉球へ渡ったのだった。それが、たった8か月の間に、この小さな島国をこんなにも愛おしく感じるようになるとは…。
ハーリー(爬龍船競争)や綱挽など、多くの琉球文化に触れた。それは普通の人々が心から歓喜し、熱狂し、そして神に祈るようなイキイキとしたものだった。そこにはいつも舞加那が居た。小さな身体で凍った私の心を溶かしてくれた琉球の女性だった。
もう一度逢いたい。私は読んでいた書物をしまい、甲板に出て、舞加那との出会いを振り返っていた。

久米村600年記念碑（松山公園内）

舞加那と成龍の出会い

初めて降り立つ琉球の地。那覇に到着すると先ずは、蔡温と会った。彼は港近くにある久米村の出身だ。
蔡温の案内で、久米村を歩く。久米村は、久米三十六世という、明の時代に渡ってきた人々によってできた華人街で、我々華人にとってどこか懐かしい感じがする村だ。歩いていくと中華風の建物があった。建物はもちろん、特に漏窓や洞門などの庭園技法が見事で、福州にある文人庭園を彷彿とさせるため、華人仲間の間で福州園と呼んでいるところだ。
ガーン、ガーン、ガーン!
「こっちだ、こっちだ、龍が暴れるぞ〜」
久米村の静かな自然に触れていると、騒々しい集団が追い越していった。
「何事だ…」
「成龍殿、最近この辺で大きな白龍が現れるという噂がありましてな。最近、ある家に雷が落ちて死者が出た。しかも葬式の時に禁忌を犯してしまい、龍が怒っているともっぱらの噂なのです」
「それで龍が暴れると?」
「そうです。近々、爬龍船競争もあるので、海難事故につながると恐れています」
「琉球でのハーリーというやつでしょうか?あれはむしろ龍を呼ぶ意味があると思いますが」
「この国は迷信を信じやすいのです」
騒がしい琉球人にいささか呆れていると、道端にしゃがみこんで泣いている20歳に満たない若さの女がいた。それほど裕福には見えないが、かんざしの飾りが洒落ていて、私が見た琉球の一般女性とは少し違う佇まいがある。
「舞加那か?どうしたんだ、どうしてここで泣いている?」
蔡温は顔見知りのようだ。
「蔡温様、白龍がかわいそうで…」
顔を上げた舞加那という娘の顔を見て、私はそれこそ雷に打たれたような衝撃をうけた。
「久米大通りに出る白龍を退治しようと、天妃宮で祈祷をしているの。あれでは龍がかわいそうだわ」
「それは、龍の呪いではありません!」
私は思わず叫んでいた。

仲島の大石

あまがし（沖縄ぜんざい）

「先ほどからこの道を歩いていて思ったのですが、ここはきれいな龍脈が通っている。この先の仲島（仲島の大石）、風水では、あそこの大きな岩は如意宝珠と解される。つまり、龍の呪いどころか、この地は龍に守られているということになります」

「龍が守っている？」

「舞加那、この人は清国からやってきた華人で、風水の知識に精通していて信頼できる人だ」

「成龍といいます。私が皆さんに、説明してみます」

つい調子に乗ってしまい余計な仕事を引き受けてしまったが、意外にも、あっさりと事は進んだ。蔡温の援護もあったが、冊封使の一員であるというだけで私の説明は説得力を持っているらしい。琉球の人々は納得し、数週間続いていたという白龍騒動はほどなく収まった。舞加那は嬉しそうだった。

「成龍様、お礼をさせてください。そうだ、ちょうどハーリー用のあまがしを作ったのよ。食べていらっしゃらない？蔡温様のお友達の冊封使様が来るとなれば、旦那様も大歓迎よ。ブクブクー茶もあるからほら、早く」

背中を押され、私たちは舞加那の『主人』宅へ向かった。そこは、この辺では割合に裕福な家のようだった。恰幅の良い老主人は、すぐに我々を中に招き入れ、歓迎してくれた。

あずま屋に通されると、舞加那が無邪気に笑いながら、あまがしを運んできてくれた。押し麦と、豆で作られたあまがしは、端午の節句にいただくという。

一緒に出てきた、ブクブクー茶には驚いた。泡をもったお茶で、上に落花生の粉が振りかけてあり、中にはあられのようなものが沈んでいる。これは那覇の名物だそうだ。

主人は、私が測量や土木の知識があるということを知り、あれこれと庭の事を相談してきた。我が国の文人庭園に近づけたいらしい。私の助言に主人は上機嫌だった。

那覇ハーリー

それからしばらくして、わたしの宿を舞加那が訪ねてきた。

「たまには、海を見るのもいいものですよ」

少し公務が残っていたが、しばし筆を休めて那覇ハーリーを見物にいった。

泊、久米、那覇という3組が、大きな龍の船に乗り競争をする。各地区から選ばれた男たちの真剣勝負だ。

ジャーン、ジャーン、ジャーン

銅鑼の音が鳴り響き、競争が始まった。観客の熱狂する声に、舞加那の声が重なる。

「久米頑張れ～！泊、那覇になんて負けるな～！ホラ、成龍さんも応援して。黄色い船が久米よ。あなたの国を表しているの。黒の泊は琉球、青の那覇はヤマト（琉球王国時代における『日本』の呼び方）を表しているの（※1）」

「そ、そうか。加油！（ジャーヨー）、加油！加油！」

「うん。久米、加油！、久米、加油！」

いつのまにか2人とも中国語で応援していた。

結局、今年の勝負を制したのは泊だったが、競技が終わった男たちは互いの健闘をたたえあっていた。これもこの国の気質なのだろう。

「あ～残念。負けちゃったね、成龍さんの国」

「え？久米ではなくて？」

「ハハハ。大きな国の人のくせに、小さいことは気にしない！」

舞加那が笑う。つられて私も笑った。心の底から笑ったのは久しぶりだ。考えてみると、琉球の人々はよく笑う。それは未来に進むために笑っているのだ。この国にいると、公人としての立場や、人を押しのけて出世しようとする自分を笑い飛ばすことができた。

オオゴマダラ

私は公務に追われ、舞加那の笑顔を思い出しながら退屈な時間を過ごしていた。用がないので、舞加那に会うこともない。私は、皇帝の使者の一員という自分の立場を恨めしく感じた。

「グブリーサビラ、成龍様、メンシェービーガヤ（ごめんください。成龍様いらっしゃいますか）、私は次良という者で久米村から使いで来ました」

次良は舞加那と同じく、あの久米村の主人の使用人だった。

彼が言うには、主人が庭を見てもらいたいという。私の助言を受け、庭が完成したというのだ。お礼に食事をとのことだが、どうやら庭自慢をしたいらしい。舞加那はいるだろうか…。私は、文鎮代わりに使っていた琥珀を懐に入れた。舞加那に会えた時のお土産だ。

次良に導かれ、久米村の主人の家に向かう。ふと、大きな樹木に目をやると大きな蝶が舞っていた。ふわふわと踊るように優雅に飛ぶ。

次良が言うには、あの蝶はオオゴマダラという、琉球、いや日本を入れても一番大きい蝶だという。大きくて目立つので鳥に狙われるのではないかと思ったが、体内に毒を持っていて、鳥たちは近づかないそうだ。

屋敷に到着すると、早速あずま屋で待ちわびた主人の庭自慢を聞かされた。

そこには舞加那の姿は見えない。出された琉球菓子のきっぱんがすすむ。

私は、手持無沙汰で、キョロキョロしながら舞加那へのお土産の琥珀をいじっていた。

「ところで御主人、この前、親切にしていただいた…若い女性。確か…」

「舞加那ですか。そうだ、ちょうどここから見える庭を背景として、この辺りを舞台と見たてることで…」

パン、パン。

主人の手が鳴る。

「お～い、舞加那、ひとつ披露してくれ」

しばらくすると、きれいな衣装を身に着けて出てきた舞加那が庭園の池の前で琉球の舞踊を見せてくれた。

琉球の芸能はすでに首里城で何度か見たことあったが、女が踊るのは初めて見た。

ただただ、素晴らしかった。琉球の洗練された踊りと音楽。そして、天女のように舞う舞加那に私は目を奪われていた。

しばらく呆然としていた私に、

「お気に召しましたか？」と主人が聞いてきた。

「あ、ああ。とても舞がうまくて見とれていました」

「本当は『加那』といいますが、この通り舞がうまいので、舞加那と呼ばれています。父親が亡くなり、家の事情で辻の遊郭に来たようです。まだ、見習いなのに芸事がうまく辻でも10年に1人の逸材と評判で。しかも、器量もイイ。先日、大金を積んで女中として身請けしたんですわ。ほらウチ、商売をやってますから、客人が来るとこうして舞を披露させているんです」

「ああ、そうですか、彼女は貧しい家の娘でしたか」

平静を装ったが、琥珀を強く握りしめる自分がいた。

それは公人としての私ではない、心の底から湧き出るようなひとりの人間の感情であった。

踊りを終えた舞加那が、深々と頭を下げた。

舞加那との間が、急に遠く感じた。国の違い、生き方の違い…なんとも表現できないが、相容れないなにかだった。

私は、琥珀を懐にしまったまま、公人として乾いた拍手をしていた。

頭をあげた、舞加那はあの笑顔だった。

しかし、私は以前とは違う顔つきだったのだろう、舞加那の顔に一瞬不安が見えた。

私に近づいた舞加那は、丁寧にもう一度頭を下げた。

「本日はお越しいただきありがとうございました」

かしこまった言葉は、まるで全てを知った私を見透かしているようだった。

「ま、待ってください」

舞加那のうしろ姿に、声を絞り出した。

「と、とてもよかったです。これを持っていきなさい」

奥に下がろうとした舞加那を引き留めるように、琥珀を差し出した。

「これを。虫が入ってます。ムカデか何かかもしれませんが、私の国では龍が閉じ込められているといって人気のものです」

主人が目を丸くしているのが分かった。龍の琥珀は、福州でもそう見られるものではない。彼の趣味からしても、のどから手が出そうな代物だろう。

オオゴマダラ

上天妃宮跡の石門

「よろしいのですか」
「あぁ…」
「どうもありがとうございます!龍琥珀、大切にします」
受け取った舞加那は、笑っているのか泣いているのか分からない顔をしていた。
帰りは舞加那が送ってくれたが、宿に戻る途中、偶然、蔡温に会った。蔡温は困ったような顔をしていた。
「成龍様、少しまずいことになるかもしれません。その時はお力を…」
蔡温は、舞加那をチラっと見てそのまま去った。その近くをオオゴマダラが優雅に舞っていた。

天使館にて

帰ると、徐葆光様から呼び出しがあった。急いで天使館に参ぜよという。
彼は、冊封使一行の中でも2番目の地位、冊封副使である。今回私を、技師として引き抜いてくれたのも彼だ。琉球国との交渉では、実質的な最高責任者である。
「成龍、こんな時にどこに行っていた」
いつもは冷静な徐葆光様が、苛立っていた。
「申し訳ありません。久米村の知人宅へ造園について少し」
「例の…か。いやなんでもない」
「如何しましたか?」
「琉球との交渉が、うまくいっていない。通例だと、我々が船で持ち込んだ品を琉球王府が買い取るのだが、今回は全てを買い取る銀が用意できないと言ってきた。この役得を期待してついて来た船乗りもいる。不満を持った者が、あちこちで騒動を起こしているらしい」
蔡温が言う、『まずいこと』とはこれか…。
「持ち込んだ商品を船ごと燃やすという噂まで出ている。このままでは琉球との外交も、いや帰国もままならないかもしれん。琉球語が出来るお前に、騒動鎮静化の役を任ずる」
「かしこまりました」
「それから…」
徐葆光様は、出て行こうとする私の背中に、ゆっくりと問いかけた。
「成龍、一時の情愛に溺れるなよ。お前には未来がある。そのために努力してきたのではないか。船が沈むのはゆっくりだが、気づくのが遅ければ一瞬で命取りだ。ましてや、今日から琉球人と交渉の仕事だ。弱みを見せるな。あの女とは別れろ!」
「…はい」
私の行動が、徐葆光様に報告されている。どうやら、華人の中に誰か私の足元をすくおうとする者がいるようだ。私は蔡温の元に走った。

天妃宮

蔡温はすでに動いていた。珍しモノ好きのあの久米村主人にあたりをつけて、持ち込んだ品を売ろうとしていた。しかし、彼が欲しいのは龍の琥珀だという。商品の中にそれが含まれている事が買い取りの条件だと言ってきたそうだ。
私は頭を抱えて蔡温の家を出た。あたりはすっかりうす暗くなっていた。
天妃宮の前に来ると人影があった。舞加那だった。
天妃は福州の航海安全の神様だが、信仰心の篤い琉球にもお宮があるのだ。琉球の人々は嵐の時、小さな船を繋ぎ流されないようにする。そんなことから縁結びのご利益もあるようだ。徐葆光様の顔が浮かび、私は物陰に隠れて様子をうかがった。舞加那は何か握りしめて祈っている。
それは龍の琥珀だった。
私があげた琥珀を握りしめ、祈りながら彼女は泣いていたのだ。
「舞加那!」
もうどうでもよかった。公人としての私が崩れる音がした。私は彼女を抱きしめた。舞加那も私の胸に顔を押しつけ、泣いている事を悟られない様にしながら抱きついてきた。
「わあぁぁ、ごめんなさい、ごめんなさい」
「どうした」
「あの男、ご主人様が、借金のかたに琥珀をよこせと。それであたし、これだけは渡さないって。だって、これは成龍様からいただいた…」
「お、落ち着いて舞加那」
「あ、あの男がとりあげようとしたので…叩いて飛び出してしまって…」
「なんだ」
「え?」
「殺したのかと思いましたよ」
「まさか!」
「ですよね。ハハハハ。舞加那、笑おう。こんな時は、笑おう」
「ハハ…」
舞加那は突然の私の催促に戸惑っているようだった。
「がははははは、はい。舞加那笑って、加油(ジャーヨー)!」

波上宮

その時の私には、怖いものはなかった。ただ彼女を守りたいという思いだけだった。
私は安宿を見つけ、舞加那にはしばらく身を隠すように伝えた。
私は精力的に働いた。舞加那のところへ行くこともあったが、仲間の華人たちにばれないように慎重にことを運んだ。琉球の窓口となって交渉にあたっている蔡温さえも気づいていなかっただろう。舞加那は、匿われている場所で自分の田舎の料理を私に振舞ってくれた。質素だけど心のこもった、優しい料理だった。そういえば、1度だけ2人で外に出た。事情を知っている次良から借りた着物で、男に変装した舞加那と琉球人になりすました私で、那覇の大綱挽を見に行ったのだ。琉球の綱挽は夜に催されるため見破られることはなかったが、徐葆光様と王府高官とすれ違った時はさすがにドキドキした。
厳しい交渉も、むしろ公人としてやりがいのある仕事となった。本当に充実した毎日だったが、不安がないわけではなかった。ひとつ一つの仕事が片付くということ。それは帰国を意味していた。

孔子聖廟

私の仕事は、買取騒動の鎮静化だけではなかった。首里王府との儀礼、接待。そして徐葆光様が王府と約束した、琉球人測量技師を育成指導するという仕事も新たに加わった。
昼は通常業務、夕方からは受講者を集めて孔子聖廟の中にある、明倫堂で教えていた。
仕事に忙殺されていたため、舞加那とは2か月逢っていなかった。
「ですから、道具にはもちろん、測量する者同士に誤差があるとドンドンずれていきます。そして…」
明倫堂の窓に人影があった。
「遅れてすみません」
引き戸が開き入ってきたのはなんと、男装した舞加那であった。一瞬驚いたが、幸いにして皆、話に熱中していて気付いていない。気付かれぬように平静を保とうとする私を見て、舞加那はつけひげから赤い舌を出している。
「よし、皆さん道具を持ってしばらく訓練していてください。遅れてきた君は、別に指導しますので、こちらへ来てください」
別室に舞加那を連れ込んだ。
「おいおい、どういうつもりだい」
「それは、逢いたかったからでしょう?冊封使様!」
「シーシー、小さい声で!」
「では、今日こそは逢いに来てくれると約束してください。さもなくば…」
息を大きく吸い込む舞加那の口をあわてて押さえた。
「分かったから。この後行くから!」
「では、波上宮でお待ちしております」
舞加那は踊るように、孔子廟から出て行った。講座を終え、私は足早に波上宮に向かった。

久米至聖廟(くめしせいびょう・孔子廟)

明倫堂

波之上の浜(波の上ビーチ)

とっくに日が暮れていた。このくらいの時間になると、月以外見ているものはない。波上宮には日本を作った神様、イザナミが祀られているという。隣には仏教の護国寺が並ぶ。神仏習合の信仰文化は日本にもあったが、琉球の人々は、さらに天妃宮や天尊廟、先ほどの孔子などの我が国の神様も信じている。信仰の世界でもチャンプルー文化なのだ。
柏手を打つと、境内に隠れていた舞加那が出てきた。今日は月も欠けていて、見えにくい。私は今夜、舞加那に求婚するつもりだった。帰国はせずに、琉球で測量の講師として生きる覚悟だった。そうすれば舞加那も安心してくれるだろう。
暗闇に、舞加那が震えているように見える…いや、違う。後ろから、顔を隠した男どもが5、6人出てきた。
「逃げて!」
舞加那の声が早いか一瞬の差で、そのうちの2人が襲い掛かってきた。私は、持っていた測量用の竿を使って応戦したが、後ろから石のようなもので殴られてしまい、徐々に意識が朦朧としてきた。
「悪く思うなよ、仲間に嫌われるお前が悪いのさ」
何発殴られただろう。動けない私は海に投げ込まれた。水面の向こうから聞こえる舞加那の声がボコボコという私の息の音に消えた。

護国寺にて

護国寺

「…っイタタタ」
長い夢から覚めたようだったが、痛みがあるので夢ではなかったのだろう。そして、それは私が生きている証でもあった。
「目を覚ましなさった。もう大丈夫だ」
野太い声に、おそるおそる目を開けると、安堵する僧侶の姿があった。
どうやら、護国寺で救護されたらしい。
「あなたは、もう3か月、生死をさまよっていたんですよ」
「舞加那は!?」
様子を伺おうとすると激痛が走った。
「しばらくはまだ安静にしておいたほうがいい。舞加那といったか、あの娘はあなたの命の恩人ですよ」
「では、舞加那は無事ですか?」
「うん、小さな体で、血だらけの貴方をおぶってな」
「住職、舞加那はどこにいるのですか?怪我しているのですか?」
「今は会えない。でも大丈夫だから安心しなさい」
「お願いです。会わせてください」
「目が覚めれば、貴国の仲間が迎えに来る手はずだ」
「嫌です、私は琉球で生きることを決めたのです。舞加那はどこですか?」
「…会わない方がいい」
「どうしてですか、私の妻です…まだ了解はもらっていませんが」
「彼女の体に龍が憑いたのじゃ」
またか。ここの連中は龍が暴れるだの、龍に憑かれるだの…寺の僧侶までこの調子か!
「お願いです。彼女に伝えなければならないのです」
ガラガラ…遠くで引き戸が開く音がした。
「蔡温です。成龍さん、意識が戻ってよかった」
「蔡温…例の件、3か月も…申し訳ない」
目くばせをすると、気を使った護国寺の住職は席をはずした。
蔡温に詫びを入れたが、どうやら例の騒動は彼がどうにかまとめたらしい。そして我々の船も、ひと月後に那覇を出港するとのことだった。
「徐葆光様はお怒りでしょうね」
「いえ、徐葆光様は、あなたの琉球での仕事を評価していました。あなたのお陰で琉球に優秀な測量技術者が育っています。国王からも感謝と、あなたの処分を穏便にという嘆願も出ています」
「琉球の…国王様が?」
「はい。琉球の女性とも別れたとのことで、徐葆光様は今回の件は不問にし、このまま帰国すると」
「わ、別れた?」
「はい。あなたの仲間が、舞加那を説得してくれて」
「ちょっと待ってください、蔡温。仲間とは誰ですか?私は舞加那と結婚するつもりです!」
蔡温の胸ぐらをつかんだが、彼は悪くない。ともすると国際問題になりかねなかった騒動の後だ。蔡温も、そして住職も、最後まで誰が舞加那を説得したのか教えてくれなかった。
さらに半月後、私はようやく歩けるようになり、護国寺から出ることになった。手当をしてくれた住職に礼をいい、わずかばかりのお金を渡した。そしてもう一度、舞加那に会わせてもらうように頭を下げたが、
「まだ、彼女の体の中には龍がおる。龍が出てくれば、いつか会えることもあるだろう。この十分すぎる金は、彼女の生活費に充てるので心配しないで帰国して欲しい」
と返すばかりであった。
いつか会える。わたしは住職のまっすぐな目を信じようと思い、寺を出た。
そのまま天使館に向かい、今回の一件を徐葆光様に詫び、感謝した。
「成龍。もういい。お前も傷ついた。この国で年を越してしまったな。これまでのことは去年の事として忘れろ。2月16日にここを発つ。いいか、帰国したら一官吏としてやりなおせ」
船出までの私は、まるで抜け殻のようだった。波々上の海で舞加那を1日中待っていたこともある。柏手もむなしくなるだけで、彼女は現れない。
「舞加那、逢いたい。龍に憑りつかれていてもいい。あなたに逢いたい」杖をついて探した。天妃宮にも孔子廟にも、綱挽の場所や、ハーリーの海にも舞加那の姿はどこにもなかった。

三重（ミー）グスク

嘉慶6年2月16日　―順風

我々の船は錨をあげ、ゆっくりと進みだした。船が岸から離れると、三重グスクが見えてきた。三重グスクには見送る琉球の人たちがいて、我々の船に手を振っていた。
「成龍様、お気をつけて…」
一瞬、舞加那の小さな声が聞こえたような気がした。
「こっちです、こっちです、おーい」
蔡温の声がする方向を探した。
「舞加那!」
三重グスクの端に、護国寺の住職と蔡温に連れられた、お腹が大きくなった舞加那の姿があった。
「舞加那、舞加那!」
彼女は、琥珀を持った手を大きく振り、時折りうなずくようにしていた。
私は、ためらいもなく大声で泣いていた。嗚咽で言葉にならなかったが、彼女の名を叫び続けた。
小さくなる三重グスクの群衆の中に、身重の彼女は消えた。船中で私はすぐに手紙を書いた。舞加那、そしておそらく会うことのできない我が子を思い浮かべながら…。

舞加那
こんな形で帰国してしまった私を許してください。私たちの子は産まれましたか。あなたは元気ですか。その子は、男の子のような気がします。彼の名前に、私の文字「龍」を付けてください。私の贈った龍の琥珀を売れば、しばらく凌げるでしょう。子どもに十分な教育を受けさせてください。私に似ていれば手に職を持つようになるでしょう。土木、石工…福州に着いたら書物を送ります。琉球国の役に立てる人間に育ってくれることを夢見ています。できれば彼に、港に龍を創るよう言ってください。私とこども、2頭の龍が、あなたと琉球を永遠に守ります。そして、いつか私も生まれ変わって龍の港を訪ね、あなたや子どもに逢いたいと思います。ずっと愛しています。

（おわり）

ストーリー制作／監修／貿数 仁然

この物語は史実に基づいた内容を元にしたフィクションです。
※1　現代では黄色／久米、黒／泊、緑／那覇という呼び方が一般的。尚、琉球王朝時代は緑を「オールー（青）」と呼んでいた。

龍柱

琉球王国、大貿易時代に思いをはせる旅

世界級スポット　フォトジェニックスポット　琉球八食スポット

沖縄が「琉球王国」であった当時、港に隣接する若狭ゾーンは
対中国貿易の重要な拠点。特に久米村（クニンダ）には
物語にも登場する中国からの冊封使という使者が多く住んでいた。
そこかしこに残る歴史を感じることのできるコース。

1 クニンダテラス
（久米村 - クニンダ）

琉球王国や久米村（クニンダ）の歴史文化に触れることができる歴史展示室（無料）や飲食店からなる複合施設。

営9:00 ～ 18:00
休水曜（水曜が祝日の場合は翌日休）　¥無料
☎クニンダテラス管理事務所
098-943-6078(9:00 ～ 18:00)
■グッドファームズキッチン（カフェ / レストラン）
営[月～金]11:00～16:00（料　理L.O. 15:00 ドリンクL.O. 15:00）、[土・日・祝]11:00 ～ 16:30（料 理L.O. 16:30 ドリンクL.O. 16:30）、[全 日]17:00 ～ 23:00（料 理L.O. 22:00 ドリンクL.O. 22:30）
☎ 098-988-9789
P福州園向かいの有料駐車場

2 福州園

四季折々の花木の間を回廊でめぐる中国式庭園。夜間ライトアップ（開園時間は季節により異なる）が人気。貸切対応も可能。那覇空港より車で約10分。国際通りより徒歩約10分。

営9:00 ～ 18:00
休水曜（水曜が祝日の場合は翌日休園）
¥【個人】高校生以上200円、小人100円
【団体(20人以上)】高校生以上160円、小人80円
※小学生未満無料 ※夜間開園時大人個人600円、小人（小学生）個人300円
P福州園向かいの有料駐車場
☎クニンダテラス管理事務所
098-943-6078(9:00 ～ 18:00)　休水曜

若狭ゾーン「龍の約束」を巡る

3 久米至聖廟
（くめしせいびょう・孔子廟）

儒学の祖・孔子とその門弟（四配：顔子・曾子・子思子・孟子）を祀る廟。孔子や四配の塑像を安置して17世紀半ばに落慶（らっけい・落成）。その後第2次世界大戦で廟など全て焼失したが、若狭での復興を経て、久米の地にて平成25年建立。

P近隣有料駐車場

4 明倫堂

程順則名護親方（ていじゅんそくなごうぇーかた）が王府に願い出て建設された琉球初の公立学校。久米村の子弟に儒学を中心に中国の公用語、外交文書の書き方などを教える学問の府。現在は公開講座「久米孔子塾」が開設されるなど市民に開かれた施設。

P近隣有料駐車場

5 天使館跡

冊封使（天使）のための施設・宿舎跡。16世紀前半にはあったとされている。冊封使の渡来は三山時代から1866年まで23回を数え、400～500人が夏から冬の約半年間滞在した。崇元寺（そうげんじ）で故琉球国王を弔い、首里城で新国王の冊封を行う国王一世一代の大行事であった。現在は旧跡標示のみ。

P近隣有料駐車場

6 上天妃宮跡の石門
（かみてんぴぐう）

那覇市重要文化財・史跡。10世紀後半以降中国にて広く信じられている航海の安全を守る神、天妃。14世紀終わりには中国福建省より琉球王国へ来た職能集団久米三十六姓とともに天妃信仰が伝わった。15世紀半ばごろに作られた上天妃宮の石門が残る。

P近隣有料駐車場

7 千日

1962年創業の沖縄風かき氷の老舗。ふわふわ大盛の氷の下にほどよい甘さの金時豆の「アイスぜんざい」300円。創業者から受け継ぐ変わらぬ味を守り続けている。

☎098-868-5387
営11:30 ～ 20:00
※冬期11:30 ～ 19:00、
休月曜　席34席、
Pあり（普通2台）

8 波上宮

琉球八社の第一位、沖縄総鎮守の社。沖縄の海の彼方にあるとされる海神の国を拝むニライカナイ信仰。その霊応の地であり、貿易の玄関口でもある場所に立つ神社。琉球の時代より航海の無事と感謝の祈りが捧げられ、地元では「なんみんさん」と親しまれる。

Pあり

9 護国寺

14世紀半ば当時の王、察度（さっと）により琉球王国の祈願寺として建立された。それ以降王が即位する際には家来数百名と共に参詣し、本堂において君臣の縁結びの盃を取り交わしたとされる寺。

Pあり

10 仲島の大石
（うふいし）

那覇バスターミナル構内にある高さ約6mの大きな岩。下部の丸くへこんでいる部分は、海水によって削られた跡。付近は明治初期に埋め立てられており、岩のある場所はかつては海岸だったとされる。県指定天然記念物。岩には拝所もあり。

P近隣有料駐車場